

西鶴と西宮えびす

——西鶴説話の生成方法への一考察——

森 田 雅 也

一、「西宮えびす」という名称について

「西宮のえべっさん」の名で親しまれる西宮神社の歴史は古い。その神社について、本稿をなすにあたり、「西宮神社」と当然なすべきと考えていたが、あながちそうでもないらしい。

そのことを明らかにするためには、ここで長い「西宮神社」の歴史を紐解き、検討を加えるべきであろうが、その手続きは本稿の本意から外れてしまう。求めるべきは西鶴当時の状況にある。

西鶴の活躍時期は十七世紀中から後期、いわゆる元禄時代である。その頃の例として、西宮神社「本殿造営棟札」〔寛文三（一六六三）年五月〕に、

上棟 撰津国西宮蛭子大明神社

征夷大將軍左大臣源朝臣家綱公御造営⁽¹⁾

と書かれており、この時点で「西宮蛭子大明神社」が正式な名称であることがわかる。このことに関しては後述する。

一方、明暦四（一六五八）年の社領を安堵する文書には「撰州西宮社」（西宮神社文書）とあり、貞享元（一六八四）年の「諍論裁許状」（西宮社中諍論裁許状）にも「撰州西宮神主」とあることから、「西宮社」と呼んでいたこともわかる⁽²⁾。

西鶴の『武家義理物語』（貞享五（一六八八）年刊）巻六の三、後述する『日本永代蔵』（貞享五（一六八八）年刊）巻二の四には西宮神社を指して「西の宮」と書かれている。

『好色一代男』（天和二（一六八二）年刊）巻二の一には「西のみやの戎まはし」と「戎」の文字が見えるが、これはある門付け芸の芸人（「えびすかき」と同じ意味）を指した呼び名として登場するもので、首にかけて箱の中でえびす神の人形を舞わせたりした芸能集団の一人である。「西宮神社」とは、その芸の発祥の地というつながりだけである。「戎」の字にこだわる必要はなからう。すなわち、これも「西の宮」の例になるであらう。

一方、後述の『日本永代蔵』巻二の四には、「西の宮」の記述箇所が登場する神を「えびす殿」としている。この点は『西鶴名残の友』（元禄十二（二六九九）年刊）巻五の二でも「西の宮の海」とした後、続いて「えびす殿」とある。『西鶴名残の友』巻三の一にも「西の宮のえびす殿への散銭」とあるが同様の例である。

以上のことから、当時の人々は建物、地域を「西宮」「西の宮」と呼び、そこで祀られている神を「えびす殿」と呼んでいたのではないかと考えられる。

本稿では西鶴当時の西宮神社を神社側からの歴史資料から検証するところにはない。江戸時代の当時の人々が西宮神社をどのように身近な生活の一部として受け容れていたかということを探究したのである。西宮神社を宗教学的、歴史的に正式にどう呼ぶかというより、現代の我々が愛着をこめて、「西宮のえべっさん」と呼ぶように、西

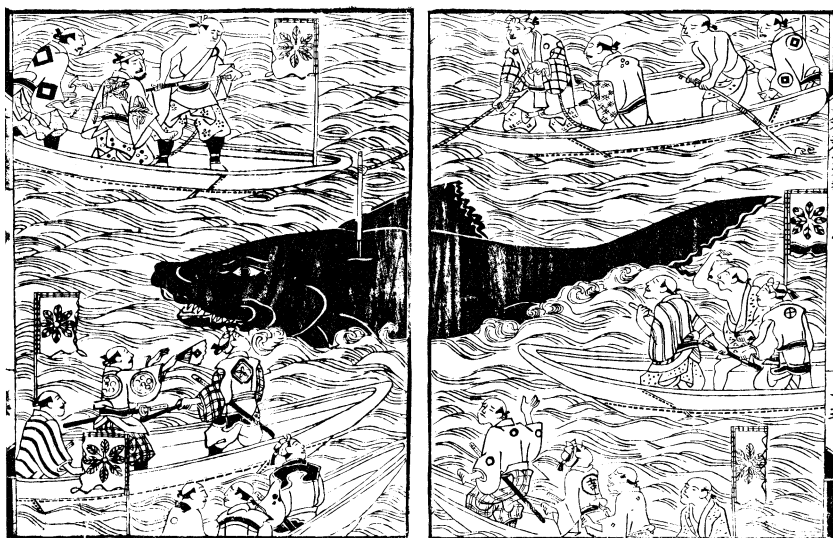
鶴当時と現代に通じる一般呼称として、便宜的に「西宮えびす」という現代仮名遣いに直して用いている。これは西宮神社が運営管理するホームページ名が「西宮えびす」であることにも発している。以下、西鶴と「西宮えびす」として論じたい。

二、「日本永代蔵」と「西宮えびす」の「早参り」

西鶴の『日本永代蔵』巻二の四「天狗は家名風車」は前半と後半に分かれる。前半部は以下である。

紀伊国泰地（太地）は鯨恵比須を祀り、繁盛している。その宮の鳥居には、鯨の三丈（約9メートル強）胴骨を立てている。見慣れないので土地の人に尋ねてみると、こんな話を教えてくれた。この浜にもりを打ち込む名人に天狗源内というものがいた。とてもよい獲物に行き合う幸運な男だということで、どの舟も彼を舳先に立てたが、ある時、一番銚を鯨に立てて源内の印の風車を立てたので、その風車が天狗の扇に似ているので「天狗源内」と呼ばれるようになった。その時、引き上げた鯨はセミクジラという巨大鯨だったので、近郷近在の村々まで沸き立ち、油を絞れば千樽、白い脂身を切り積めば山もないのに雪の富士、赤身を積めば高尾の紅葉と賑わった。そのような中、源内は捨てるべき鯨の骨を買い取ったところ、まだまだ油を絞ることができ、たちまち金持ちとなった。さらに近年には鯨網を工夫してさらに儲け、次第に富は増し、「楠木分限」と呼ばれる大金持ちとなった。（本文挿絵は【図一】）

この前半部の鯨猟に関する説話性については、染谷智幸氏が口頭発表した「天狗源内論―近世漁業のイストワール」（第二十七回西鶴研究会 二〇〇八）において中世以来の歴史語りとして位置づけられている。本稿としても、さらにここで天狗源内の鯨漁について言及し、日本文学あるいは世界文学において、漁または猟に対峙する人間の真



〔図 1〕

摺な姿を描いた説話との差異を論じ、その説話性もしくは文芸性を解明したいところであるが本意ではない。

この大金持ち「楠木分限」となった話はモデル小説とされる。

太地で鯨に網を絡ませ遊泳の自由を奪い、羽刺が鉾仕留める網捕法が考案されたのは延宝三（一六七五）年のことである⁽³⁾。貞享年間（一六八四〜一六八八）、その太地の和田惣右衛門頼治が徳川光貞公より「太地」の姓を賜り、太地角右衛門と名乗ったが、彼こそが天狗源内のモデルであるとされる⁽⁴⁾。

『日本永代蔵』にはモデル小説が多い。「三井越後屋八郎右衛門」、「藤屋市兵衛」、「鏡屋惣左衛門」、「桔梗屋甚三郎」、「糸屋十右衛門」等実在した、実在する数多い当時の大金持ちが登場する。天狗源内はまさに西鶴当時のヒーローでモデル小説の典型といつてよい。

この章の冒頭書き出しは

智恵の海広く、日本人の袒はたらきを見て、身過みりかにうとき唐

楽天が逃げて帰りし事のをかし。

前半部とした最終の一文は、

昔日は浜びさしの住みせしが、檜木造りの長屋、二百余人の獵師をかかへ、舟ばかりも八十艘、何事にしても頭に乗つて、今は金銀うめきて遣へど跡はへらず、根へ入りての内証よし、これを楠木分限といへり。

と終わっている。これはまさしく太地の鯨突きの名人から太地の鯨の長までなり、一財産をなした天狗源内一代の出世譚である。

資産のない身から「智恵」と「才覚」だけで大金持ちとなるといふ粋組みも『日本永代蔵』が副題に「新大福長者教」とするようにならぬ西鶴説話の生成法として、古くから指摘される雛形である。

本来、この話を前後半に分けたのは、前半部が一説話として完結しているからである。それに比し、後半部の記述は以下である。

「Ⅰ」信あれば徳ありと、仏につかへ神を祭る事おろかならず、「Ⅱ」中にも西の宮を有難く、例年正月十日には人より早く参詣けるに、一年、帳綴の酒に前後をわすれ、やうく明方より手船の二十挺立を押しきらせ行くに、いつの年よりおそき事を何とやら心がかりに思ひしに、年男の福太夫といふ家来、子細らしき顔つきして申し出せしは、「二十年このかた朝えびすに参り給ふに、当年は日の入り、旦那の身代も挑灯程な火がふらう」と、思ひもよらぬあだ口、いよく氣をそむきて脇指に手は掛けしが、ここが思案とをさめて、「春の夜の闇を挑灯なしには歩かれじ」と、足を延ばし胸をさすりて苦笑ひの中に、

「Ⅲ」早船広田の浜に付けて、心静かに参詣せしに、松原淋しく御灯の光幽かに、皆下向ばかりにて、参るは我より外になく、心をせきて神前になれば、「お神楽」といへど、社人は車座にゐて銭つなぎかかり、誰の彼と兼ひあひ、舞姫の跡にて鼓ばかり打ちて、そこくに埒明け、鈴も遠いからいただかせて仕舞はれける。

「Ⅳ」神の事ながら少し腹立ちて、大かたに廻りて、又舟に取り乗り、袴も脱がず波枕して、いつとなく寝入りけるに、跡よりえびす殿、えぼしのぬげるもかまはず、玉櫛して袖まくり、片足あげて岩の鼻から船に乗り移

らせ給ひ、あらたなる御声にて、「やれ〜、よい事を思ひ出してゐてから忘れたは。この福を何れの獵師なりとも、機嫌に任せ語り与ようと思ふに、今の世の人心せはしく、我が云ふ事ばかりいうてざら〜と立ち行けば、何を云うて聞かす間もなし。おそく参りて汝が仕合せ」と、耳たぶによらせられ小語き給ふは、「魚島時に限らず、生船の鯛を何国までも無事に着けやうあり。弱りし鯛の腹に針の立て所、尾さきより三寸程度を、とがりし竹にて突くといなや生きて働く鯛の療治、新しき事ではないか」と語り給ふと夢覚めて、「これは世の例ぞ」と、御告に任せけるに、案のごとく鯛を殺さず。これに又利を得て、仕合せのよい時津風真鱸に船を乗りける。まず、「I」「信あれば徳ありと、仏につかへ神を祭る事おろかならず」と『毛吹草』などにみる諺は、素封家となつた天狗源内の信心深さのエピソードを語る大切な導入部となつている。

だからといって、江戸時代に限らず大金持ちというものが欲の皮が突つ張り、さらなる儲けを頼み、福の神を狂信的に信じる姿を揶揄したものでも、天狗源内の特殊性をあげようとしているのでもなからう。これは後述する。

むしろ、「II」から以降の一風変わった「西宮えびす」の「早参り」という習俗をあげることで、当時の読者たちをひきつけようとしたのではないかと考える。

今も「西宮えびす」では例年正月十日に「人より早く^{まか}参詣ける」行事はあり、これを「開門の神事」としている。十日の午前六時に表大門を開門し、早駆けの一番手は福男として報道されている。参加する千人を超す人々は氏子に限らず、前日の九日から待機し、開門と同時に本殿の初鈴を目指しなだれ込む。この「十日戎」の行事は戦前の昭和九年の頃もほぼ同様⁽⁵⁾で、それ以前から続いてきたものと考えられる。

しかし、管見では、「西宮えびす」の様々な神社の歴史を調べても、「早参り」という行事を西鶴の頃まで遡源できない。

前田金五郎氏は、「正月九日は忌籠祭で、翌十日早朝参詣し、福德を祈る。これを十日恵比須という。」⁽⁶⁾とされて

いるが、西鶴当時の典拠が不明である。他の『日本永代蔵』の諸注も「西宮えびす」の「早参り」の項について言及されていないことは同様である。

しかし、西鶴がことさら「西宮えびす」の早参りのことをあげ、天狗源内がその「早参り」に「二十年」来、固執し続けてきた姿を描くのは、当時の人々、読者には浸透していた事実であったといえよう。それを読書効果として利用したのである。それだけでなくは、「いつの年よりおそき事を何とやら心がかりに思ひしに」という天狗源内の不安の滑稽さが共有できない。

事実、その行事を「朝えびす」と呼んでいたことも右の『日本永代蔵』から確認できる。

もちろん、現在の「開門の神事」のように、例年正月十日午前六時に「西宮えびす」が開門するとともに全力疾走で奥殿に走り込み、短距離走によって覇を競う形⁷⁾ではなかったであろうが、場の共感として、当時の読者はその詳細は知らなくても、周知の行事「西宮えびす」の「朝えびす」という行事は、了解できたであろう。

さらに現在、その先着一番手〜三番手は「福男」とされるが、右の『日本永代蔵』に天狗源内の朝参りの苛立ちを助長する「年男の福太夫」という鯨獵師の家来が存在する。この不自然な名前の設定は、「福男」を連想させているのではあるまいか。すなわち、西鶴の当時すでに、この「福男」も「朝えびす」によって得られる称号のようなものではなかったかと推測できる。

西鶴作品において、特に都市部を舞台とした作品に信憑性が高いことは、その説話生成の特徴といえる⁸⁾。

西鶴は『日本永代蔵』を刊行する直前に、諸国説話物として、『西鶴諸国ばなし』〔貞享四（一六八七）年序〕を出版している。『日本永代蔵』に比べて、圧倒的に奇談偏重ではあるが、この頃、西鶴は驚異的な多作期を迎え、量産された西鶴説話は多種多様となり、その系譜を整理するには、かなりの手続きが必要となるものの、いずれも都市や上方に関わる説話に関しては現実描写においてすぐれており、説得性を有している。当然この方法は、『日本永代蔵』

にも通じるはずである。

西鶴説話の中に都市伝説が多く存在する中で生成された、撰津の西宮神社説話も都市部に近く、同様の特色を有していたのではないかと考える。庶民周知の「西宮えびす」という信仰から逸脱しては、作者と読者の関係は良い関係にはならなかったはずである。以上のような視点から西鶴版「西宮えびす」説話は、どのように生成しているであろうか、検証してみたい。

三、西鶴と「西宮えびす」の「居籠り」

それでは、「西宮えびす」の「早参り」とはなぜ行われていたのであろうか。巻二の四を分析する前に考察したい。

先述したように、江戸時代の十七世紀中頃、西宮神社の正式名が「西宮蛭子大明神社」であったことは先述したが、以下の岡田米夫氏の研究⁹⁾によっても、明らかである。

西宮神社が西宮夷として夷神を祀るところとされたのは平安末で、『伊呂波字類抄』(天養―治承)のうちに当社のことをいって、「夷(毘沙門 エビス)」とあるのを、文献上の初見とする。…(中略)…次にこの「西宮夷」が、その祭神を「蛭児神」と明記するに到ったのは、鎌倉中期のことで、『神皇正統録』に「蛭児トハ西宮ノ大明神、夷三郎殿是也。」とあること、又『源平盛衰記』のうちに「蛭子ハ…撰津国ニ流寄テ海ヲ領スル神ト成テ、夷三郎殿ト顕レ給テ、西宮ニオハシマス」とあるのがそれである。

また、『西宮神社史話』¹⁰⁾では、

今日えびす神の総本社である西宮神社の主祭神は、西宮大神こと、この蛭児神であります。えびす神を蛭児神

とする説は、古くからいわれているところでありますから十分尊重しなければなりません。即ち、えびすを蛭児と同一神であるとした思想や信仰は、えびす神が文献に見えはじめた平安末期よりは、遙かに時代の下った鎌倉時代の中期から南北朝の初期にかけて行われました。

と、岡田氏と同じ史料をあげて説明されている。

ところで、この当時の人々が、「西宮えびす」を「夷神」ではなく、「蛭子神」として認識していたことは、西鶴の説話生成にも大きく関係してくる。

「蛭子(児)神」については、『古事記』では、

「汝は、右より廻り逢へ。我は、左より廻り逢はむ」とのりたまひき。約り竟りて廻りし時に、伊耶那美命の先づ言はく、「あなにやし、えをとこを」といひ、後に伊耶那岐命の言ひしく、「あなにやし、えをとめを」といひき。各言ひ竟りし後に、其の妹に告らして曰ひしく、「女人の先づ言ひつるは、良くあらず」といひき。然れども、くみどに興こして生みし子は、水蛭子。此の子は、葦船に入れて流し去りき。

と記されている。さらに、『日本書紀』「神代卷」でも、

又天柱を化堅つ。陽神、陰神に問ひて曰はく、「汝が身に何の成れるところか有る」とのたまふ。対へて曰はく、「吾が身に具成りて陰元と称ふ者一処有り」とのたまふ。陽神の曰はく、「吾が身にも具成りて陽元と称ふ者一処有り。吾が身の陽元を以ちて、汝が身の陰元を合せむと思欲ふ」と、爾云ふ。即ち天柱を巡らむとして、約束りて曰はく、「妹は左より巡れ。吾は右より巡らむ」とのたまふ。既にして分れ巡りて相遇ひたまふ。陰神乃ち先づ唱へて曰はく、「妍哉、可愛少男を」とのたまふ。陽神後に和へて曰はく、「妍哉、可愛少女を」とのたまふ。遂に夫婦となり、先づ蛭児を生みたまふ。便ち葦船に載せて流しやりき。

と記されている。イザナギ・イザナミ二柱の神は御子として「蛭子」神を海へ流されたというのである。この海の

「蛭子神」が西宮えびす神なのである。

同じく『西宮神社史話』には、「蛭児神」は毎年行われる「十日戎」のために西宮においてになるので、そのお姿を見ないように努める「居籠（いごもり）」という行事が最近まであったことを古老の話として載せ、加えて以下のように書いている。

元禄十四年刊行の『撰陽群談』によると、毎年正月九日蛭児神が広田社に神幸されるので村民は門戸を閉じて外に出ない、また門松を逆に立てて居籠といい、翌日早旦諸人戸を開いて一斉に社参する、これを十日夷といったと記しているし、また、享保二十年出版の『撰津志』にも毎年正月十日斎居祭を修し前日戸を閉じ、その一昼夜声響を遏密（とどめるの意）すると記している。

また、西鶴以前の例として、

『足利季世記』によると、

正月十日（永正十七年）は西宮の神事にして御狩りなり。居籠とて人音もせざるに細川高国、神事を憚らず合戦を始め給へば神罰にて打負け給ふと沙汰しけり

「永正十七年」とは、一五二〇年であるから、『撰陽群談』『撰津志』との間を埋めることとなり、西鶴当時にも「西宮えびす」で「居籠り」の神事が行われていたことがわかる。

ところが、西鶴の『世間胸算用』『元禄五（一六九二）年刊』巻四の一「闇の夜の悪口」冒頭に

所のならばしとて、関東に定め置きて、大晦日に祭あり。津の国西の宮の居籠り、豊前の国はやともの
和布刈、
めかり
…

とある。周知のように『世間胸算用』は時間的に大晦日に集約された短編集である。当然、巻四の一冒頭は大晦日の祭礼尽くしである。西宮の「居籠り」も例外ではないはずである。

「所のならばしとて、関東に定め置きて」とあるが、関東の大晦日の祭礼の例としては、芝神明宮や神田明神などあがるが、地方に目を転ずれば枚挙にいとまない。本章も大晦日に行われる京都祇園での「けずりかけの神事」をベースとしているので、右引用冒頭部はその枕といえる。それを今日の京都の「おけら祭り」とすれば、情報過多の今日であるから簡単に了解できることであるものの、西鶴の当時の情報量では万人が知り得ない。西宮の記事に続く、北九州門司の和布刈神社すなわち「早鞆明神」の神事は、除夜過ぎて、寒風の玄界灘に臨む磯に、神主自らワカメを刈り、神前に供える行事である。これはある意味尋常ではない神事である。この神事と関東の神事が大晦日の奇祭であれば、文脈から「津の国西の宮の居籠り」も大晦日の奇祭として例示されているわけなのである。

『世間胸算用』にあげる「西の宮の居籠り」が大晦日の行事であったことについて、諸本注釈は「古くは大晦日の行事」としていただいであるが、前田金五郎氏⁴¹や『対訳西鶴全集』は大晦日の『神道名目類聚鈔』を引書としている。前田氏は（補注一五七）にこの書の原文を引かれているが、この書の序は元禄十二（一六九九）年、刊記は元禄十五年となっている。

となると、西鶴当時、「西宮えびす」で「居籠り」の神事が行われていたのは大晦日の行事となる。これは元禄十四年刊行の『摂陽群談』の「毎年正月九日」の行事と矛盾、齟齬していることを指摘しなければならない。

一般的に「居籠り」の神事は全国に存在する。明日の大祭を前にどこかに籠もり精進潔斎するのはどこでもある話である。しかし、前日の「居籠り」から正式な祭礼行事として扱われる例となると限られてくる。それでも多くの例がある中で、ことさら、「西宮えびす」の「居籠り」があがるというのは、それだけ有名であったためであろう。西鶴当時の「西宮えびす」の「居籠り」の神事の実態については、課題としたい

いずれにせよ、『日本永代蔵』では九日の「居籠り」の神事には言及していない。十日の「早参り」を背景として展開している。それは衆目が「西宮えびす」の「十日えびす」では、前日の「九日」より、その早朝に集まっている

ためであろう。十日の「早参り」は、前日の九日より満を持して備えるために起こる現象で、西鶴当時、すでに一大イベントとなっていたことが推測できるのである。

現在の「三日戎祭り」、すなわち「宵えびす」、「本えびす」、「残り福」がこの「居籠り」の神事と関係していると考えてよからうが、それは別の分野からの研究成果を待ちたい。

四、「手船の二十挺立」での海の「早参り」

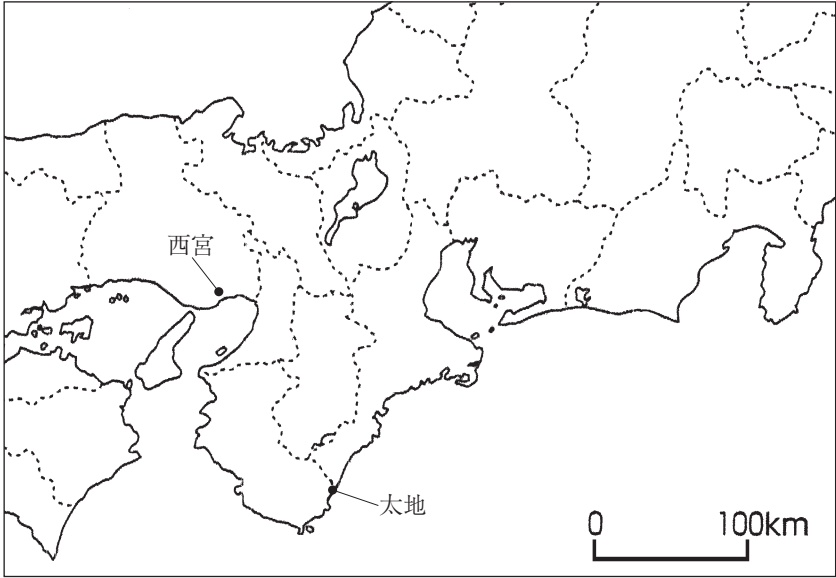
『日本永代蔵』後半部「Ⅱ」では、天狗源内は二十年來「十日えびす」の「早参り」のために、十日の早朝「西宮えびす」に到着していたとしている。ところが、ある年、「帳綴の酒に前後をわすれ」たために西宮に夕方到着したというのである。

「帳綴」とは売り掛けの元帳を作ることであるから公務である。しかし、その仕事始めの「帳綴」の祝いの酒を飲み過ぎて遅れたのは源内の過失である。源内が慌てて西宮に駆けつけるこの場面は、その苛立ちの火に油を注ぐ「年男の福太夫」の発言も含め、笑いの場であって、真剣にその行動を追うべきではないのかも知れない。

しかし、遅れたとはいえ、太地を「やうく明方」に出て、いくら「手船の二十挺立を押しきらせ」たにしても、西宮にその日の夕方には着いたわけである。これは距離的にはあまりに無理があるように思われる。【図2】

紀勢本線は海沿いにあるので、路線図から距離を算出し、さらに埋め立てられる以前の江戸時代頃の大坂湾を考慮すれば、ざっと陸路で二百五十キロ強であろう。ここにマラソンの時間や車の時速をあてはめてもよいが、現在でも特急列車を用いて約四時間半はかかる。とても十二時間では到着できない。

ところが海となると違ってくるのではなからうか。おおよっぱに海里で約百四十海里ほど。十二時間の所要時間と



〔図2〕

すれば毎時十二ノット程度が必要となるであろう。江戸期の帆船は十ノット以下であるが、この船は「二十挺立」の手こぎ動力である。天狗源内の「手船」である以上、【図1】の挿絵のような足の速い「くじら船」であろう。

太地にある「捕鯨船資料館」に展示されている「第11京丸」は、昭和三十年代から第一線で活躍した近代的捕鯨船であるが、十六・五ノットである。天狗源内の「くじら船」も鯨を見つけた短時間においては、相応のスピードが出たと想像できる。

だからといって、毎時十二ノット程度の速度を手こぎ船で十二時間も保つことは難しいであろう。特に海に出ては潮流というものがある。逆らえばびくとも動かない。激しい潮流では壇ノ浦、来島海峡など八ノット前後もあるという。不可能な数字かも知れない。ただ、うまく潮流にのれば速力もあがるであろう。

いずれにせよ、操舵に不明なため、難所紀淡海峡、潮流や潮の満干などの困難さがわからず、素人の推測の域でしかないが、可能性を全否定することはできない

いはずである。

ところで当時の「くじら船」は単に鯨漁に用いただけではない。堅牢・軽捷を要求される「くじら船」の用途は多い。

江戸時代の「くじら船」は最速の船であるとともに、江戸では洪水の際の激流にも漕ぎきれる馬力のある船とし、寛保三（一七四三）年以来、常備管理されていたほどである。¹²⁾

【図3】は、徳島藩が参勤交代で渡海の際、藩主が用いた徳島市立德島城博物館に現存する「徳島藩御召鯨船 千山丸」である。図録の説明¹³⁾によれば以下である。

安政四年（一八五七）

全長一〇四四・〇 肩幅二七七・〇

徳島市立德島城博物館蔵

参勤交代の際、藩主が御座船に乗り移るために用いたとされる船。参勤時には藩主は城を出発し東に進み、福島橋東詰の南側から千山丸に乗船した。新町川を下り沖洲辺りで御座船に乗り移った。鯨船は本来的には捕鯨を目的としたが、船脚が早いため船団の指揮や連絡等に利用された。藩の船のなかで藩主関係の船は丹塗りであったが、鯨船タイプの船は側面に絵が描かれている。千山丸は金箔地に青や赤で軍配や団扇等が描かれ格別豪華である。

船尾の戸立に「安政四年巳九月御船」と陰刻され、一三代藩主斉裕時代に造船された。

全国で唯一現存する大名の船として、また最古の和船として平成八年に国指定重要文化財（歴史資料）となった。

すなわち、徳島藩主としてのタグボート、曳船だけの役割ではなく、船足が速いため、船団指揮や連絡の役割も担

うことができたのである。そうすると、「くじら船」は藩主の御座船を大きく上回らないと、この役割は務まらないことになる。

『西鶴諸国ばなし』巻二の二「十二人の俄坊主」は、紀州藩徳川頼宣公が紀州加太神社に遊ぶ話である。話の後半で加太神社の神域を犯し、大蛇に襲われるが、その時果敢に頼宣公は大蛇に立ち向かうのが、その後、十二人の家臣も立ち向かう。

沖より十式人乗りし小早、横切に押すと見えしが、蛇蝸うはばみ一息に呑み込み、身もだへせしが、間もなく跡へぬけて、汀に流れつきしを見るに、残らず夢中になつて、かしら髪一筋もなく、十式人つくり坊主となれり。

結果、十二人は大蛇に飲み込まれて、吐き出され、命はとりとめたものの恐怖のため、皆丸坊主となってしまふのである。

ここで注目できるのは「十式人乗りし小早」が主君の御座船を追い越し横切り戦ったことである。

「小早」とは、いろいろな解釈があるが、以下が明解である。

中世末期以降、水軍で使用された軍船の一種。安宅船あたけ・関船せきを近代海軍の戦艦・巡洋艦に比するならば、さしずめ駆逐艦に相当する軽快な軍船である。関船の別称早船の小型という意味で小早といわれ、また小関船とも呼ばれる。近世水軍では関船とともに重用され、櫓数はふつう二十丁前後から四十丁までで、ときには六丁立までの小船をも含めることもある¹⁴⁾。

熊野水軍の活動域であった紀州藩が、水軍が使うような高速船として、御座船警備に小廻りのきく「小早」を何艘かつけていても不思議ではない。ただ、『西鶴諸国ばなし』のこの話の挿絵に船が画かれていない。したがって、「十式人乗りし小早」の様子が不明であるが、その推測を可能としてくれるのが【図4】である。

【図4】は同じく「蜂須賀家御船絵巻」である。同じく図録の説明によれば以下である¹⁵⁾。

明治二十八年（一八九五）

三八・六×七七九・四

徳島市立徳島城博物館蔵

御座船至徳丸・御召替一言丸・千山丸等といった徳島藩水軍の諸船を描いた絵巻。九場面から構成され、御座船至徳丸の出航の様子や沖合で帆を立てて進む姿が華麗にしかも克明に描かれている。徳島水軍の船を知る上で重要な資料。

つまり、徳島藩のくじら船も「十式人乗りし小早」も水軍、軍事用なのである。それゆえ、「十式人乗りし小早」も相当なスピードを出して殿様の火急に駆け着くことができたと考えれば、『西鶴諸国ばなし』の「十式人乗りし小早」は、「千山丸」のような船であったのであろう。

もともと【図4】の右端の三艘のくじら船は水主が六、七人ほどこしか画かれていない。画法として省略したとも考えられるが、石井謙治氏は、「小早」に通じる「関船」について、

槽数というのは、その船に装備する最大の槽の数のこと、関船に限らず軍船の大きさを表すために慣用されていたもので、これが何石積といつて積石数で大きさを示す商船と違う点であった。

と説明されている⁸⁰。そうなると、この船は「十式人乗りし小早」と同規模の「小早」といえるかもしれない。

ところで、天狗源内の船は「二十挺立」である。右の二例より、かなり大きな特別な「くじら船」であったはずである。むろん、いつその馬力と速度が出たであろう。

このように考えると、『日本永代蔵』に「II」のような逸話をあげるのは、まったくの嘘ではなく、西鶴の頃、毎年正月十日に、太地から「くじら船」で長駆懸命に漕ぎ、水しぶきをあげて、「西宮えびす」へ早朝「早参り」を行う勇壮な姿は、何年も続いた西宮浜、「西宮えびす」の風物詩であったのではなからうか。

この想像はあながち外れていない。以下のような記述がある。

(十日戎に) その昔、恒例の漁業グループが四国や九州方面からよくやって来た。夜を徹して瀬戸内を渡って西宮港に上陸し、そのまままっすぐに社頭に向かい参拝をして、たいてい明け方か早朝が多いようだが、大漁祈願が終わると、休む時間も惜しむようにさっさと帰路についた⁴⁷⁾。

おそらく例年は余裕を持って、それこそ「千山丸」のような「二十挺立」よりは一回り小さな尋常の船で駆けつけていたのではなからうか。ただし、「二百余人の獵師をかかへ、舟ばかりも八十艘」を持っていた天狗源内。配下の船総力で堂々の大船団の「早参り」を行っていたはずである。

ところが、今年が遅れたために「二十挺立」の船一艘で駆けつけることになってしまった。

年男福太夫の「当年は日の入り、旦那の身代も挑灯程な火がふらう。」という発言は縁起でもない極めて非礼な物言いである。天狗源内が「思ひもよらぬあだ口、いよ／＼気をそむきて脇指に手は掛けし」と怒りにまかせて斬り殺そうとしたのも当然である。ここで源内をぐっと我慢させたのは、神参りの途中であることと、例年の豪壮派手な「早参り」を知るゆえの軽口、無理からぬことと自戒したためではなかったろうか。

そのように考えると現在も行われている「西宮えびす」の「早参り」は、西鶴の頃は陸上の開門の神事だけではなく、海上からも行われる雄壮な光景ではなかったかと推測できるのである。

五、海神としての蛭子神

毎年行われる「早参り」。その一途すぎる、健気な天狗源内の姿。誰に褒められるわけでもなく、出費ばかりがかさむわけで合理的に考えれば、大損である。

同じく『日本永代蔵』巻二の一「世界の借家大将」の儉約家藤市に言わせれば「世の費え」とでも一蹴されそうな愚かなぜいたく話である。

ここまで「西宮えびす」の「早参り」に心的に、物的に入れ込む天狗源内。ユーモラスであり、愚直なまでの滑稽さが後半部のここまでのペースとなつていゝのではなからうか。

〔Ⅲ〕以降も天狗源内の惨憺な様は続いている。

早船広田の浜に付けて、心静かに参詣せしに、松原淋しく御灯の光幽かに、皆下向ばかりにて、参るは我より外になく、心をせきて神前になれば、「お神楽」といへど、社人は車座にゐて銭つなぎかかり、誰の彼のと兼ひあひ、舞姫の跡にて鼓ばかり打ちて、そこ〜に埒明け、鈴も遠いからいただかせて仕舞はれる

「早参り」どころか十日戎にも遅れて着いたために、すべてがずれたのである。まず、浜から広田神社に参詣するが、人通りが少なく、常夜灯の火も幽かである。皆、帰る者ばかりで参るのは自分たちばかり。「お神楽」を頼んでも社人は賽銭の勘定。誰の彼のと云つて、いやいや舞姫のうしろで申し訳程度に鼓を打って片付け、祈祷の鈴も遠いところで振つて終わりにされたというのである。まさに十日戎の祭りの後、人事に裏切られた醜悪な滑稽なのである。

しかし、これをすべてを裏返せば、例年の「西宮えびす」の「十日戎」の賑わいの姿となる。一日の大勢の参拝客の前にいかな社人でも疲れ果てることは仕方ない。ここをもつて責めることはなからう。「Ⅳ」において、「神の事ながら少し腹立ちて、」と寛容なのは、人の常として社人の無愛想な行為を許したためであらう。

あるいは「大かたに廻りて、又舟に取り乗り、袴も脱がず波枕して、いつとなく寝入りけるに」というのはふて腐れた態度だけではなく、先にあげた四国や九州漁業グループが「大漁祈願が終わると、休む時間も惜しむようにさつさと」帰路についたのと同じ、船参りの常の行動であつたのかも知れない。

いずれにせよ、意気消沈した天狗源内の前に奇跡が訪れる。「ゑびす殿」の出現である。いずれの者も自分のことだけ祈ってとっと帰るので遅れてきたおまえにだけ教えようと、鯛の生きたままでの保存法を教えてくださいるのである。これによって源内はまた利を得て大金持ちになった、というのである。

その奇跡と現実との整合性は、「I」「信あれば徳ありと、仏につかへ神を祭る事おろかならず」という天狗源内の愚直なほどの信仰心にあることはいうまでもない。

しかし、鯨漁が生業の天狗源内になぜ、鯛での儲け話となるのか。こちらの点に矛盾が生じる。

その答えは本来、西宮沖は鯛の一大漁場であったからである。

『撰津名所図会』巻七には「西宮の御前澳おまえおきの桜鯛は蛭子三郎殿つり初給ひしより世に賞す。これ我国の名産にして、中華あつしに鯛ある事いまだ聞かず」として「西宮えびす」縁の鯛を褒めている。当然、鯛の大生産地で仮死状態で市場に出す方法を知れば、利を得て当たり前である。

そう考えると「IV」の天狗源内は「西宮えびす」と「鯛」を結びつけるための役割人物かも知れない。

ところで、西宮の古伝承に以下のような話がある。

昔鳴尾の浦（西宮東方三キロ）の漁夫が武庫の海の沖で夜漁りをしていたところ、その網が平常よりたいへん重く感じたのでよるこんで引上げてみたところ魚ではなく、奇しき神像のようなものがかかった。漁夫は何心なくつぶやきながらそれを海中に遺棄して、さらに沖遠く行くうちに和田岬のあたりにさしかかった。そこでもまた網を曳いていると、不思議や先ほど武庫の沖で見送った神像がまたかかってきたではないか。今度はただ事ではないと感じ、像を船にのせ家に帰って大切に祀った。ところがある夜の夢に神の託宣があつて、「吾は蛭児神なり、国々を廻つてこの地に来たが、この地より少し西方に好き宮地がある、そこに居らんと欲する、よく計らえよ」と教えられた。漁夫は驚いてこの夢の有様を里人に語つて一同の同意を得、ついにさきの像を御輿に乗

せ西の方のお前の浜をさして進み、しばらく仮宮にとどめた後、その里人ともどもに、相図って好適の地に鎮め祀ったのが、現在の戎社すなわち西宮神社なのである。

これこそ海神としての蛭子神を指しているのである。天狗源内も海上で「えびす殿」から告げられたのであるから、まさしく「西宮えびす」のご本体、蛭子神に遭遇したのである。

話もどるが本文「Ⅲ」で源内がすぐに西宮神社に行かず、広田神社↓松原↓西宮神社と参っていることに気づく。【図5】は西鶴当時の西宮神社図である¹⁸⁾が、境内も含め、今とさほど変わらない。西宮神社絵図としながら、右上に広田神社も画かれ、その濃密な関係がわかる。

広田神社と西宮神社の関係は、先述した「居籠り」の神事が古くは広田神社で行われていたこともあり、鎌倉末期の作と思われる『二十二社本縁』には、「廣田社撰社仁(に)夷都(と)號寸留和(するは)蛭子仁天(にて)坐都母(とも)申伝也」とあり、『古史伝』には「式なる撰津国武庫郡廣田神社の枝宮に西宮大神と稱ふ神あり」とある¹⁹⁾。つまり、神社の格から広田神社↓松原↓西宮神社は当時の人々の一般的参拝ルートであったのではあるまいか。

そうすると、この後半部「Ⅲ」からすでに天狗源内は物語の主人公を離れて、「西宮えびす」を参る人の代表となつて以下の展開する話そのものが「西宮えびす」の縁起話となつていると指摘できるのである。その眼目が本文「Ⅳ」からのえびすと鯛のカップリングなのである。極論すれば、このモチーフはまさしく全国のえびす様の御神影に通じるものなのである。

そもそも「西宮えびす」はえびす本社。末社の太地の鯨えびすからの代表者の訪問とすれば、宗教的意味合いも強く、説話性も高くなるといえる。

ところで、さらに金持ちとなった生け鯛の保存法を、えびす神が天狗源内に授けた理由は「おそく参りて汝が仕合せ」なのである。十日戎の「残り福」がすでに巷間に流布していたとはいえないであろうか。管見ではその史料を未

見である。この西鶴当時の巷問の西宮えびす観、さらなる説話生成過程の事例の分析研究を課題として本論考を終えたい。

註

- (1) 西宮神社宮司 吉井良隆編『広田神社御鎮座壹千八百年記念 広田・西宮両宮史の研究 史料篇』西宮神社 二〇〇一年刊。
 - (2) 右に同じ。
 - (3) 第二部「モノとカタチの基礎知識」林英夫・青木美智男編『事典しらべる江戸時代』柏書房 二〇〇一年刊。
 - (4) 秋道智彌「日本くじら物語」『知る楽 歴史は眠らない』NHK出版 二〇〇九年刊。
 - (5) 「Ⅱ 招福のまつり・十日戎 開門神事と福男」『福の神 えべすさん ものがたり』戎光祥出版 二〇〇三年刊。
 - (6) 『新注 日本永代蔵』大修館 一九六八年刊。
 - (7) 二〇〇八年度福男には、当時本学総合政策学部在学中の「榮悠樹」君が一番福となった。彼は本学陸上部で一〇〇m短距離走の選手であった。この神事の距離は門から本殿まで約二〇〇mの競争であるが、そのレベルの高さがわかる。
 - (8) 拙稿「西鶴の描いた説話の世界」中嶋隆編『二十一世紀日本文学ガイドブック 井原西鶴』ひつじ書房 二〇一一年四月刊行予定(二〇一〇年入稿済み)。
 - (9) 「西宮神社と海神信仰」西宮神社社務所編『西宮神社の研究』一九七六年刊。
 - (10) 西宮神社宮司 吉井良尚著・吉井良隆改訂版 二〇〇二年刊
 - (11) 『世間胸算用 付現代語訳』角川日本古典文庫 一九七二年刊。
 - (12) 小木新造・吉原健一郎等編『江戸東京事典』三省堂 二〇〇三年刊
 - (13) 図録『特別展 大名の旅―徳島藩参勤交代の社会史― 徳島市立徳島城博物館 二〇〇五年刊。
 - (14) 丸山雍成・小風秀雅・中村尚史編『日本交通史辞典』吉川弘文館 二〇〇三年刊。
 - (15) 注⁽¹³⁾に同じ。
- 『和船 Ⅱ』法政大学出版局 一九九五年刊。

- (17) 「えびす信仰の心」注(5)に同じ。
- (18) 貞享三(一六八六)年「西宮神社」絵図。右上が「広田神社」。**【図5】**掲載にあたっては欄宜吉井良英にご配慮いただいた。記して感謝したい。
- (19) 西宮町教育委員会編『西宮町誌』一九二六年刊。

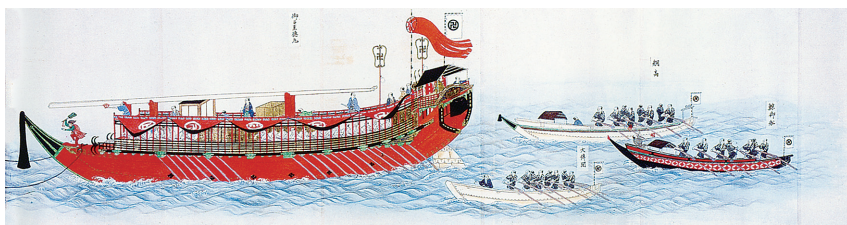
テキストには、『日本永代蔵』『古事記』・『日本書記』ともに日本古典文学全集(小学館)を用いた。本文の傍線・傍点はすべて森田が付した。

また、**【図3】****【図4】**掲載にあたり、所蔵者、徳島市立徳島城博物館に転載の御許可をいただいた。記して感謝したい。

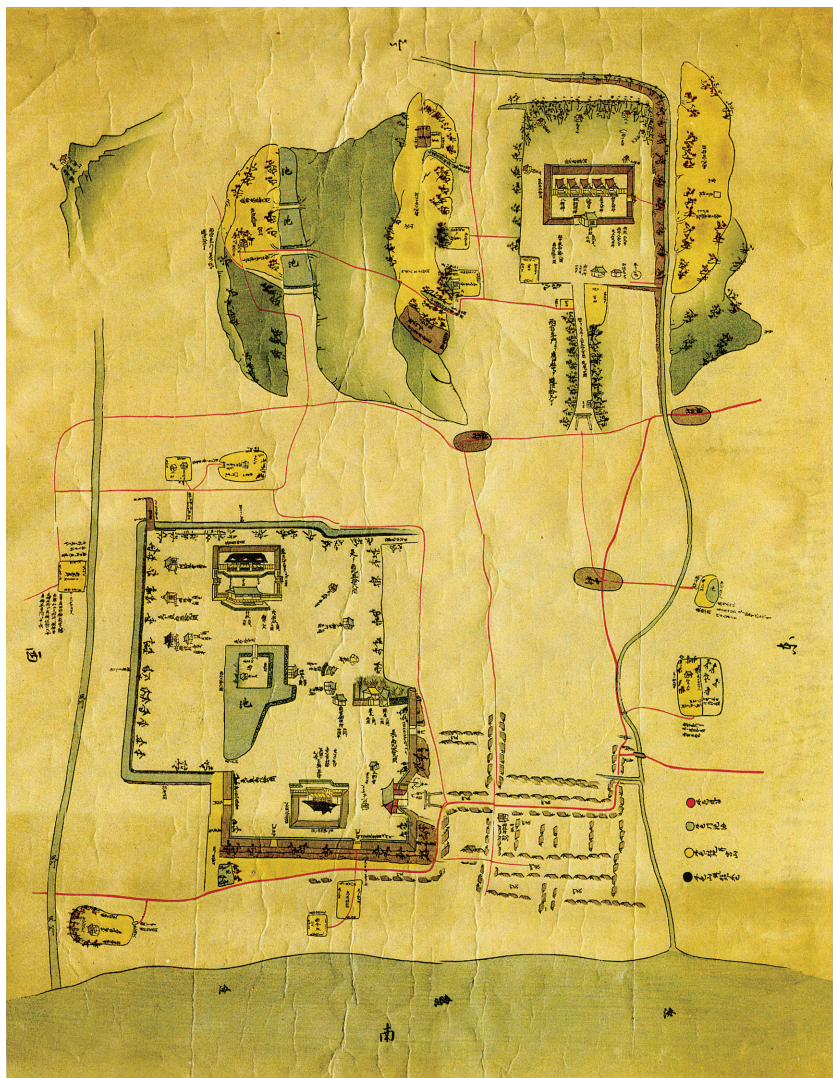
なお、本稿の一部は、二〇〇九〜二〇一〇年度関西学院大学共同研究「海洋世界と人・モノ・ことの移動ネットワーク」の一員として、研究補助をうけた成果として報告するものである。



[図3] 徳島藩御召鯨船 千山丸 1艘
徳島市立徳島城博物館蔵



[図4] 蜂須賀家御船絵巻 森崎春潮筆 1巻
徳島市立徳島城博物館蔵
掲載の都合上、1巻を上・下に分けている。



〔図5〕貞享三年絵図「西宮えびす」と広田神社（上）